

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 國學院大學図書館所蔵『佐國物語』の解題と翻刻

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 荒木, 優也 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000673">https://doi.org/10.57529/0002000673</a>

## 國學院大學図書館所蔵『佐國物語』の解題と翻刻

荒木優也

徳江元正先生は、この物語を紹介するにあたり、キーワードとして四つの美しい言葉を披露されている。一つは夢、一つは花、一つは蝶々、一つは歌、和歌である。そして、「大江匡房から坂東玉三郎の助国まで、まずは〈佐國説話〉のあらまし<sup>①</sup>」という広い視野で論じられている。

本学図書館所蔵『佐國物語』は、先生の論文「すけくに・サコク・ソコク―『佐國物語』小攷―」によりひろく知られるところとなった一本である。別名を『胡蝶物語』『花つくし』ともいい、版本としては他に正保三年（二六四六）刊本が確認されている。本書は、それよりも時代がくだる延宝年間（二六七三〜八二）頃の刷りであり、同じ版本はいまだ管見に及んでいない。書誌については、すでに先生により紹介されているが、解題・翻刻という本稿の性格上、少しく私なりに補足しながら、以下に改めて示しておく。

- 〈外 題〉「（絵／入）佐國さくもの語 上（下）」〔左肩刷題簽。子持ち枠〕
- 〈内 題〉ナシ
- 〈保存状況〉手擦れ多し。落書き多し。
- 〈表 紙〉薄緑色無地表紙
- 〈見返し〉本文共紙
- 〈二面行数〉一四行（二丁表のみ二行）
- 〈句読点〉ナシ
- 〈 絵 〉二三図（見開き八面。上下四面ずつ）
- 〈柱 刻〉「花つくし（丁付）」
- 〈 体 裁 〉袋綴（四つ目綴じ）
- 〈表紙寸法〉縦凡二・七糎×横凡一五・八糎
- 〈 匡 郭 〉縦凡一六・七糎×横凡一三・〇糎
- 〈 丁 数 〉上冊…一〇丁、下冊…一〇丁。ともに遊紙ナシ。
- 〈濁 点 〉ままアリ
- 〈刊 記〉ナシ
- 〈印 記〉ナシ

本文を正保三年刊本『花つくし』と校合したところ、漢字のあてかた等の表記や字配りに違いがあるものの、文章はほぼ一致する。ただし、一部異同が認められたので、以下に示しておく。

（佐國物語）

- 上冊 1 丁表                   （二行アキ内題ナシ）
- 裏 4 行目                   よるの露
- 14 行目                   心さし
- 4 丁表 10 行目               ひねもす
- 8 丁表 13 行目               申さんと

（正保三年刊本）

- 花つくし
- ゆふ露
- 御心さし
- ひねもす
- 物申さんと

	裏3行目	くもるらし	くもらし
	6行目	とて	とおもひ。
下冊1丁表11行目	われく	我等	
3丁表8行目	ひめこや	ひめみや	
4丁裏10行目	たとへ	たとひ	
5丁裏3行目	三国二	三国一	
12行目	くわらく	くらく	
10丁表6行目	心く	ころく	ころく
裏1行目	様くの花今を	さまくの花いまを	
	匂けり	にほひふかく	
2行目	わたるける	わたりけり。	
3行目	ほんなふそほたい	ほんなふそくほたい	
6行目	故に	かるかゆへに	
	しやうしつくる	しやうじづる	
	(刊記ナシ)		

正保参年三月吉日／松田勘兵衛尉開板

下冊5丁裏3行目の「三国二」は、「南都の東大寺興福寺は——の大伽藍」と二つの大寺院が並べられていることから、「三国二の大伽藍」ではなく、「三国二の大伽藍」にしたのであろうが、「三国二」とは耳慣れない言葉である。

また、同12行目「くわらく」の「他人の——は他人によれり」とは、白居易「太行路詩」の「百年苦樂由他人」が典拠であろうから、正保刊本の「くらく」が正しい。おそらく「百年の歓楽も一日に満つる」という当時のことわざや「百年の歓楽も、命終われば夢ぞかし」という謡曲『邯鄲』の詞章などに見える「歓楽」の言葉に引きずられて「くわらく」という言葉が出てきたのであろう。

なお、8丁表3行目には、ともに「かとはしく」とあるが、『室町時代物語大成』に「いとカ」と注されるように「いとほしく」が正しいだろう。参考までに写本で確認すると、たとえば石川透氏蔵『胡蝶物語』では「いとほしく」、慶應義塾図書館蔵『胡蝶物語』では「うとはしく」となっている。<sup>(1)</sup> たった一ヶ所ではあるが、間違いが正保刊本と共通し、また本書の柱題が正保刊本の内題と同じ「花つくし」であることから、本書の成立には正保刊本が関わっている可能性が考えられるだろう。ただし、絵はまったく構図・種類・絵柄ともに正保刊本と違っている。

また、本書は上下ともに10丁に収まるが、下冊の末尾、特に10丁裏は10丁で収めるためなのか、一行の文字数が他の丁に比べて格段に増えている。他作品の版本などでそういった現象があるかどうかを調べる必要があるだろう。

まずは、本書を翻刻することによって、その題材の一端を提供したい。

## 註

- (1) 徳江元正「すけくに・サコク・ソコク」『佐國物語』小攷―(石川透編『魅力の御伽草子』三弥井書店、平成二二年)
- (2) 正保三年刊本は、東京大学文学部国文学研究室蔵本の翻刻(『室町時代物語大成』第十)を用いて校合した(国文学研究資料館HP [http://dbrec.nijiac.jp/KTG\_B\_100018442] 上でマイクロフィルムを参照した)。
- (3) 石川透編『胡蝶物語』(三弥井書店、室町物語影印叢刊54、平成二五年)による。
- (4) 『室町時代物語大成』第五による。

## 【凡例】

- 一 以下は、國學院大學図書館蔵『佐國物語』一巻二冊（貫二六一一―一二）の翻刻である。翻刻に際して、以下のような措置を施した。
  - 一 行配りなど出来るだけ原本に近い形になるように示した。
  - 一 漢字、仮名ともに通行の字体に改めた。
  - 一 使用した記号は左記のとおりである。
- ……破損部分。ただし判読できる文字は、横に（ ）でその文字を示した。

(上 冊)〔冒頭二行分アキ〕

中比の事にやありけんみやちかきあたり

こてふといへる人ありいかなるゆへにや此人はつ<sup>(ま)</sup>□を

かたらふ事もなかりければあひすへき子もなく只

春秋のはなにうき身をやつしいろくさまくの草木

のはなのたねをあつめてせんざいにうへおきこれをたのし

みければ京わらんべともこの人をこてふとなつて□ると也

こてふ一人のは、をもちけるか世にこえてこうくをなし

いつきかしつきしに五十年<sup>いそじ</sup>あまりのあきのなかはにかり

そめの風のこ、ちとていたはりつきほどなく十日□

うちにむなしくなりぬ此人よそのなけきにたに□□□

いたはる人なれはましておんあいふか□□人のは、□

事<sup>(な)</sup>□  
れ□

けれどもそのかひなしまことにゑしやじやうりのならひ

なれはたれかこのみちをのかるへきとおもひとりせめての

事にはなそのに出で心をすましけるにあしたに

さかんなりし花のゆふへにうつろひよるの露をふくみて

ゑめる花もあくる日かけにちりしほれぬまことにしやう

じやひつすいのをきてまのあたりなりよの中の

人のさかへおとろへも又かくのとししゆみの四しうの

中にも此せかいはらうしやうふじやうのさかひなれは一代

けうしゆのしやかほとけまつせのしゆじやうにしやうじ

むじやうのさためなき事をしらしめたまはん御はう

べんにじやうほん大わうのきさきまやぶにんのたい

ないをかりたまひてかりに人げんにむまれしつた

たいしと申奉りしか十九の御としよりほつしんしゆ

きやうの心さしありければ御ちゝじやうほん大わう

これをなけきおほしめしいかにもして御こゝろを

なくさめたまはんためにみやこのめぐりに四せつ

四きをまなひ給ふたいしはこれをゑいらんあるにまつ

ひかしおもてに出給へはあらたまりぬる春のそらこちふく

風にさそはれてむめが香ふかき山のはにさきみた

れたるはつさくら今をさかりといはつゝじ松にかゝれる

藤なみのよせくる出の山ふきもちりみたれつゝ



とぶてうのはかなき夢やたのむらんかすみのまがき  
 へたてつゝも、さへつりの鳥のこゑきくものどけき  
 けしきなりされともときうつりなは花もちりうつろ  
 ひなんまことにこれもほたいのたねそとおほしめし  
 過ぎせ給ふにみなみおもてを見給へはときはかきは  
 にしけりあひ卯の花さける木の間よりかへらんに□<sup>(は)</sup>  
 しかしとなきすて、ゆくほと、きすあとなつかしきたち

「2丁表

(第一図) こてう花をあいする所

「2丁裏・3丁表

はなのかほりもふかきむらさきの雲をひたすかさわ水  
 にいろもことなるかきつはた風さへかほるはちすの  
 いとのにこりにしまぬ御こ、ちにてこれにもさらぬめて  
 たまはずにしをはるかに見給へは秋のけしきのいろく  
 にちくさのはなのさきつゝくすその、はらのいとす、き  
 むすびもとめすちる露にしほれてむしのごゑさ  
 やくなきすかるにもいと、なをあきのあはれはしられ  
 けりいり日ののこる山のはにしきをさらすもみち

はもいろこきよりやちりぬらんあかつきかけてさほ

しかのつまこふこゑをきくにつけてもほんなふのやみ

にまよふらんとうちなめ給へはやう／＼秋もくれ冬の

けしきにかはりきてこのはをさそふきたしくれお

のへもみねもしろたへの雪ふりうつむすみかまのけふり

たえたる山かつのすみかも思ひしられつゝいと、哀はまさりけり

「 3 丁裏

これを見かれを見るにつけてもみなほたいのたね

ならずといふ事なしとていよ／＼ほつしんしゆぎやうの

御こゝろさしふかく成給ひて十九の御としの八月十五日の

夜たいりをしのび出給ひてこんていこまにめされ

しやのく大しん一人めしつれだんとくせんのさかしき

みちをしのき給ひてあらゝせんにんをししやう

とたのみやかてほだいしゆのもとにて御かさりをおろし

給ひ花のたもとをひきかへあさのころもに御身を

やつし御なをはくとんしやみとそ申けるあかつきは谷

に下りてあかの水をくみひ□<sup>(る)</sup>はひねもすみねにのほ

りて花をつみつま木をとり夜はよもすからざぜ

むの床に御まなごをさらししゆしやうさいどのために  
 なんぎやうくぎやうしたまひてつゐにしやうがくならせ  
 給ふむかしはじやうぼんだいわうの御子しつだ太子と申

「 4丁表

(第二図) 花のせいともこてうあんぢつへ来る

「 4丁裏・5丁表

せしいまは三がいとくそんのしやかによらいとあらはれ  
 給ひ一さいのしゆじやううじやうひじやうさうもくこく  
 どまでじやうふつのゑんをむすび給ひて御とし

八十にして二月中の五日にづほくめんさいにふし給ふと  
 かやされは三世れうたつの御ほとけたにむじやうのおきて  
 はのがれさせたま<sup>(は)</sup>□すいはんや人げんにおゐてをや  
 とうほうさくか九□のざいうつらの八まんさいも名のみ  
 のこれるはかりなりかゝるをしへをうけながら色に  
 そみかにめて、二度りんゑのこうにかへらん事こそあ  
 さましけれとおもひさだめてせんざいにうへおきし花  
 にも心をとめすひごろあつめおきししざいざうく  
 をもうちすてあ<sup>(さ)</sup>□のころものすみそめを身にまと

ひひかし山のかたほとりに草のいほりをむすびゆふ  
へにはしんによじつさうの月をすまして春の花

「 5 丁裏

のうつろひ秋の木葉のちりつくすにつけてもいよく  
はかなき世のありさまをくはんして

いけるもの草木のみかは何かさて

此世にのこるものやあらなん

かやうにくちすさみきよ水のかたをなかめやり

南無大じ大ひのくはんぜをんひくはんたかへ給ふ

なとふしをかみけるにみなみにあたりてけふりほの

かに見えければけにこれはとりへ野にてそあるらんぬ

しはたれともしら雲のきえてさきたつゆふけふりいつ

身のうへになるへきそやす糸の露もとのしつくと

ゑいしけるかのへんじやうかことはもおもひ出されて

いとあはれなりければ

みれはけふこゝろほそくもとりへ野に

たへぬけふりのあけくれのそら

「 6 丁表

## (第三回) こてふせつほうの所

花のせい上郎と成り法を聞

「6丁裏・7丁表

まことにあしたにはかうかんありてせいろにほこ  
 るといへともゆふへにははつこつとなりてこう  
 けんにくちぬとつらねおきしもいま一しほのあ  
 はれをそもよほしけるさるほとにせきやうに  
 しにかたむきおちこちの寺／＼のかねさたかに  
 聞えければ又もやきかん入あひのかねとゑいぜし  
 うたをおもひ出して

いつのまにけふの日もまたくれはとり

あやしきほとのいりあひのかね

かやうにおりにふれことにしたがひ心をすましあかし  
 くらし給へはみやこのうちはいふにおよばすきん  
 ごくたこくのものまでもつたへき、つねにまふてき  
 たり此ひしりをはいし奉りまつせのしゆじやう  
 をたすけたまはんとてみろくふつのむまれきた

「7丁裏

り給ふといひならはしけるかをのつからみろく上人  
 とそ人の申けるあまりに人のおほくあつまりけ  
 れはかとはしくおもひ給ひて

こゑをき、いろを見るにも世の中に

こゝろとまらぬすみそめのそて

ひとり世をのかれてすめるいほなれは

のきもる月もいとはしきかな

かくてなをもうき世とをからんかたをもとめんと

て北山のおくへわけ入人けまれなるみねにしは

のいほりをむすひおこなひすましておはしける

にある夜のやはんはかりにしばのあみとをほと

／＼とた、くおとす野分の風のさそふにやと思ひともし

火をか、け心をすまし聞いたるにかさねて申さんといふ

おとすひるたにも人のおとつれさるにいかなるもの、

きたるへきたゞてんまはじゆんの我道心をさまたけ

むとてきたるらんよしなものにてもあれすましつる

心の月はくもるらしものをおほしめしたれなるらんと

のたまへはこれはこのあたりのものにて候がもとよりざい  
 ごうふかき女の身にて候へはいま上人の御をしへをうけ  
 のちの世をたすかり参らせんとてこれまで参りて  
 候といふひじりきこしめしお、せはさもあるべけれども  
 かやうに世をすてはてたるいほりのうちへ女人の御身  
 なるにしかも夜ふけていかてかかれ申へきそいそき  
 かへらせ給へとおほせければ此女房聞て上人のおほ  
 せにてさふらへともつみふかき女の身にて候へはこそ  
 のりにはにはちかつき候へ五ぎやく十あくのもの女人  
 ひじやう草木までもたすけたまはんとのほとけの御せい  
 願にては候はすやそのうへ我みかやうに老たるあまの  
 事にてさふらへはなにかはくるしかるへきとてかつける衣  
 を引のけたるをしはのあみ戸のひまよりもさやけき  
 月に見給へは六十にあまりたるらんとおほしきあまの  
 うすあをのきぬにねりぬきかみにうちかつき露に  
 しほれてた、すみたりひしり見たまひてさてはくるし  
 からぬものそとおもひしはのあみ戸をひらき給へはこの

あまやかてうちにいりぬひしりおほせけるは此あたりの  
人とおほせられ候か家はひとさととをきところな

るに夜ふけてしかも女人の一人わたらせ給ふ事方く  
ふしんにこそ候へとおほせければまことは五てふあたり  
のものにて候みやこにてはつねにまいりつかへし事  
のさふらひしむかしをかたり申さはおほしめしあわす  
る事も侍るへしそれはまつさしおきかゝるまよひふ  
かき身のゆくへ一げくの御しめしをもうけまいら

「 9 丁表

(第四図) 聞うくる／のりの／光は玉かつら／

かけても／たのむ／花の夕かほ／夕かほ

(第五図) おもひきや露を／むすへる／いとほきの／

こよひし／花の／ひも／とけんとは／はぎ

「 9 丁裏

(第六図) ついにまた／きゆへき／ものを／あたしの、／

つゆ／おみなへし／たむけ／にやせん／女郎花

(第七図) ふたりなく／みつなき／のりの／一筋に／



き、やう／くると／たつねきに／けり／き、やう

「 10 丁表

せんために是までまいりてさふらふと申所へ又としの  
 ほと二八はかりなる女ほうのやなきいろのきぬきて  
 うすむらさきのこそてかみにかつきする／＼とさし入かの  
 あまきみのわきになをり身つからも御あとをした  
 ひまいり候五しやう三しうの雲あつうしてしんによ  
 の月をすます事なしいまあひかたきゑんにひかれて  
 是までまいりたる事こそうれしうさふらへいかさまに  
 も上人の御をしへにまかせすゑのやみちをはらし  
 まいらせんとて露にしほれなみたにむせひてそらい  
 はいしけるかゝる所に又十四五はかりなるおんなの  
 うすもへきのきぬきてきなるこそてうちかつきあし  
 たゆくたちゐるかとおもはゆけにてあまきみの  
 わきにうちそはみてゐたるありさまいはんかたなく  
 らうたけて見えけるひじり御らんじていかなる人々

「 10 丁裏

## (下 冊)

なれはめしつれらるゝ人もなくてかくあさましきいほり  
 のうちへはわたらせ給ふそとのたまへはかの女ほうしはしは御  
 返事をも申さてやゝありてみつからはちゝはゝもなきみ  
 なし子にて候かいとけなき時よりものおもふ事たえやら  
 て道しはの露ともきえぬへく思ひつるにつなぬ月日  
 たちゆくまゝにいとゝおもひはますかゝみおもかげにたつ  
 ちゝはゝのことなつかしきあけくれはほんなふのあかあつく  
 つもりはらふ心の風たえてなをまふしうの雲きり  
 をいかにもしてはらじやせんときたり侍るなり上人  
 の御ちくうにひかれりん糸のこうをまぬかれ父母  
 われゝもろともにむゐほうかくのうてなほにいたらんと  
 おもふ心をしるへにてかたゝの御あとをしたひ参候  
 となみだにむせび申ければひじりもあまきみも  
 すみそめの袖をそぬらされける又そのあとより

(第八回) あひかたき／のりのおしゑ／は／うとんけの

はなも心を／ゆりて／こそ／きけ／ゆり

(第九図) のりの／こゑ／きく／より／はやく／雲／きりの／

はる、／こゝろの／月ぞ／さやけき／きく

「1丁裏

(第一〇図) うれしさに／露をはらひて／こよひ／しも

みのりの／にわに／いての山ふき／山ぶき

(第一一図) しら／露の／玉ゆら／むすふ／いと／すゝ／き

みのりの／あめに／うる／ほひ／に／けり／すゝ／き

「2丁表

つゝはたちはかりなる女房の廿四五人いさなひ来る

を見ればいつれも花をかざりたるありさまなりあ

るひはくれないしろきはかまきしらあやにむら

さきのはかまふみしたき十二ひとへのきぬに花つくし

ぬい又からあやからにしき色をつくしてかざりたて

次第／＼になみるたり中にもすこしとしたけたりと見

えたる女房上人にむかひ申やう是までいさなひ参り

候人／＼は御らんせられ候ことくいつれもわか候へ共さいごう

ふかき女の身ながら月花に心をそめてあかしくら

すのみにて身の、ちの世の事をもしらすさふらへは

みやこのうちにていかなるちしきをもたのみまいらせ  
 御しめしをもうけまいらせんとおもひなから心ならさる  
 身のかなしきはいつとなくうち過ぬいま此上人の御  
 事世にすくれさせ給ひてたうとくありかたき御じひ

「2丁裏

とうけたまはりおよひさふらへはみなく是までいざなひ  
 まいりて候かゝるぐちのまよひをゆめはかりはるけて  
 たび候へとていとあはれけにそ見えけるひじり聞し  
 めしこはふしきなる御事かなたくの御ありさまを見  
 奉るにたゝ人ならぬ御よそほひなり雲のうへ人にて  
 御わたり候そや十二人の御つほねの中にもようごき  
 さきにてもおはすらんさらずはくげのうちにてもこのゑ  
 とのか九てふとのか二条一条たかつかさふしみとのゝひめこや  
 かきくていはむろさいおんじ其ほか家たかき人の姫  
 君なるらんしからはたまのすだれにしきのちやうのうち  
 にてつねはひわをたんしことをしらへうたをゑいし  
 ておはすらん又かりそめのものまふてなどにも御こし車  
 花をかざりとねりさつしきあたりをはらひ上らう

さふらひ御とも申くらまの山のさくらかりかもや八幡やはたの

「 3丁裏

(第一二図) のりのこゑ／きく／うれしさの／あまり／にや／

しのふ／に／たへぬ／我なみたかな／しのぶ

(第一三図) きゑやすき／露のうきみを／かるかやの／

花に／なれつ、／ねかふ／のちのよ／かるかや

「 3丁裏

(第一四図) なてしこと／おもふほとけの／めくみ／あれは／

およひ／なき／身の／たのもしき／かな／なてしこ

(第一五図) のりの師に／めくりあひ／こしおくる／まの／

花さへ／えめる／こ、ちこそ／すれ／おくるま

「 4丁表

ものまふてなどにこそ出させ給ふへけれかゝるいふせき

しほのいほりのうちへしかもよふけものすこぎおりふし御

とも申人もなくかちはたしにてきたり給ふはた、人げん

にてはよもあらしあたこの山の太郎坊ひゑの山の二郎坊く

らまのをくそうじやうか谷にすまひをなす大てんぐ小

てんくのつうりきをめくらし此ひじりが心をまよはせて

魔道<sup>またう</sup>へ引いれんとてきたりたるかさらずは此山にすむ

こらうやかんのものともかうへをたすからんために此そうを  
たばかりいのちをうばいとりし、むらをふくせんとして女に

へんげてきたるらんよしそれとてもちからなしたとへ

まゑんのものなりとも又はこらうやかんにてもあれこの

かいへしやうをうけたるもの、仏法にちかづくはたしやうこ

のゑんそかし一け一くのくたくにてむりやうむへんの

つみをめつしぶつくはほだいにいたらしめん事うたかひ

あるへからすかた／＼のありさまをほとけのいましめ給ふ所を

あら／＼しめし申さんまつねはんきやうに見えたるは三千大せん

せかいのもろ／＼のなんしのほんなふをあわせて女人壱人の

ごつしやうとすととき給ふあるひは又女人は地ごくのつかひ也

なかくほとけのたねをたつおもてはほさつに似てないしんは

やしやのことしともとかれたりしかるによつてもろ／＼の

ほとけにもきらはれ十方のじやうどへむまる、事もかな

はすと一さいのきやう／＼にきらひうとまれたる事その

かずをしらすそも／＼我朝はそくさんへんちのせうこく

とはいひなからきんめいてんわうの御代にはしめてぶつ  
 ほう此国にわたりしやうとくたいしこれをひろめた  
 まひしよりこのかたぶつほうるふの国となりあく  
 まげだうもおのつからしりそきたみのわつらひなく国  
 をたやかなり津のくにてんわうじをぶつほうさいしよ

「5丁表

の御寺としてひゑいさんゑんりやくじはでんげう大し  
 のかいひやくくわんむてんわうの御こんりうやくしいわうの  
 ぶつさうあり又なんととうだいじこうぶくしは三国二てく  
 の大からんしやうむてんわうの御こんりうかさきのてらはてん  
 ちてんわうの御ぐわんじよかうやのみねはこうほう大しの  
 御かいひやくなり其外しら山たて山ふしのたけとかくし山  
 しやかのたけたつとき山くみねくの寺くれいぶつれい  
 しやかずをしらすおはしますかみねをさかへたにをかきり  
 女人をふかくきらひいましめ給ふそかしまことにうちには  
 五じやうのつみふかくほ□□は三しやうのさはりありときく  
 又たうのはくらくて□かんことはにも人むまれて女人の  
 身となる事なかれ百年のくわらくはたにんによれりと

ありまことにかやうにないでんげてんにきらわれかく

あさましきざいごうの人／＼のいかてほとけになり

「5丁裏

給ふへきをしやかによらいの御じひのありかたさは一念

すいきのくとくして□<sup>(む)</sup>りやうざいのつみをめつしそくしんしやう

ふつと、き給ふ又□<sup>(れ)</sup>もんにさうもくこくとしつかい

じやうぶつともとかれ□<sup>(れ)</sup>ほうしやうひしや□<sup>(う)</sup>にいたるまでみな

仏しやうをうけなからあくごうほんなふのやみにまよひちごくには

おつるなりめいごさんかいじやうご、十はうくうほんらいむとうざいかじやうう

なんぼくともありまよひのゆへに三がいのるてんありさとるゆへに

十はうもむなしほんらいのめんもくをあきらかに□<sup>(見)</sup>れはと□<sup>(う)</sup>さいも

なんぼくもあるべからずとおほしめし心の玉をみがき給ふべし

たとへはあくごうほんなふのおこる事は大こうすいのごとしいかにとして

これをせきとめんやた、その水をきりなかし／＼せばついには水

つきぬべしその水におほれぬれはすなはち地ごくなりこ、を以て

地ごくとをからずごくらくまのあたりなりされはおのこなりとも

ものごとにしうちやくしあるひはかなわぬ事をねかひ又はれん

「6丁表



(第一六図) あひかたき／のりに／あふひの／花かつら／

かゝる／なみたは／袖に／あまりて／あふひ

(第一七図) ありかたし／まことに／のりの／こえきけは／

すき／なん／のちの／かこそ／たのもし／すきな

「 6 丁裏

(第一八図) むらさきの／はなにうつ／ろふ／ふち／なみの／

よする／みきは□／にしの／かのきし／ふち

(第一九図) はかなくも／ゆ□<sup>(ふ)</sup>へを／□たぬ／あさかほの／

はなの／たもとに／かゝる／しら露／あさかほ

「 7 丁表

ほあいしうにひかれ一念をきる事なきものは六道ししやうに  
りん糸すべし女人なりともまうねんをきりすて、ひとへに

ほとけをたのみたまは、何かうたかひあるべきぞとさまく／＼に

おしへ給へは此女房たちはみなずいきのなんだに袖をうるほし

上人をはいし奉りあらありかたのけうげやなたちまちりん糸

まうしうの雲はれてしんによじつさうの月をのづから

すめる心ちしてありかたくこそおほへさふらへ□いとま給はり候へ

とてみなく座をたちければひじりあやしくおほしめしさも

あれかた／＼はいかなる人にておはしますそ御なのりあれとおほせけれ  
は此女ばうみなもとの座になをり上人の仰こそ御ことほりにて

候へ身の一大事をさつかりまいらせていつまで我なをつゝむへきいで／＼

我なをあらはさんわれらはみな花のせいにて候上人みやこに御座

有し時はあけてうあひせられ申せしにいつしかすてられまいら

せてそのまうしうふかきゆへに是迄参御けちゑんにひかれ

「 7 丁裏

てぶつくわをうくる事こそありかたけいさやめん／＼のち迄

の御かたみにこしをれうたなりとも一しゆつゝつらね申さんとてたもと

よりたんじやくをとり出して

ゆふかほ 聞うくるのりのひかりはたまかつらかけてそたのむ花のゆふかほ

はぎ おもひきや露をむすへるとはぎのこよひし花のひもとけんとは

女郎花 つめに又(ゆ)き□へきものをあだしの、露をみなへしたむけにやせん

き、やう ふたつなくみつなき法を一すちにき、やうくるとたつねきにけり

ゆり あひかたきのりのおしへはうどんけの花も心をゆりてこそきけ

あさかほ はかなくもゆふへをまたぬ朝かほの花のたもにかゝるしらつゆ

さく のりのこゑさくよりはやく雲きりのはる、心の月そさやけき

山ふき うれしさに露をはらひてこよひしもみのりのはにいで山ふき

糸すゝき 　しら露のたまゆらむすふいとすゝきみのりのあめにうるほひにけり  
 藤はかま 　ぬきすてしうすむらさきのふちはかまのりのゆかりを尋てそきる  
 忍くさ 　のりのこゑきくうれしさのあまりにやしのふにたえぬ我なみたかな  
 「 8丁表

(第二〇図) 　こゝろなき／身も／たのもし／く／おもふ／かな／

のりの／はちすの／ゑんに／ひかれて／はす

(第二二図) 　まよひつる／心のやみの／をのつから／

はるゝは／のりの／しほん／なり／けり／しをん

「 8丁裏

(第二三図) 　ふかみくさ／ふかくたのみを／かけまくも／

かしこき／のりの／おしへ／うけつゝ／ふかみ草

(第二四図) 　つたのはの／つたなき／身さへ／たのみ／あれや／

のりの／おしへの／道／たかは／すは／つた

「 9丁表

かるかや 　きえやすき露のうきみをかるかやの花になれつゝねかふのちの世  
 なてしこ 　なてしことおもふ仏のめくみあれはおよひなきもたのもしきかな

仙翁花 　いかにせんおふけなきみのかくはかりたへなるのりのおしへなからは

小くるま 　のりの師にめくりあひこしおくるまの花さへゑめるこゝ地こそすれ

あふひ あひかたきのりにあふひの花かつらかゝるなみたはそてにあまりて

すみれ こよひ聞のりに心のすみれ草花もやゑみのまゆひらくらん

ふちの花 むらさきのはなにうつるふふちなみのよするみきはやにしのかのきし

しらん 一すちの道を□らんとたつねきてのりのおしえ□あふそうれしき

はちす 心なき身ものもしくおもふかなのりのはちすのゑんにひかれて

しをん まよひつる心のやみのおのつからはるゝはのりのしをんなりけり

ふかみ草 ふかみ草ふかくたのみをかけまくもかしこきのりのおしへうけつゝ

末つむ花 くないの色にそみてもなにかせんすゑつむはなのたむけならずは

あちさい あちさいのよひらにさける花の枝おりてほとけのたむけにやせん

露草 つゆ草の露の間ながら法の庭にたちまちいりてたのむのちのよ

「 9 丁裏

つた つたのはのつたなき身さへたのみあれや法のをしへの道たかはすは

くづ くつのはのうらみもなとか残るへきこゝろの秋の風したゝずは

わすれ草 たをりつゝ三世のほとけにたむけして花にうきをもいさわすれ草

おはな よろこびのなみたなるらしかた岡にまねくお花かそてのつゆけき

おき あき風にそよき出たるおき(ゆ)のこゑもおのつからなるのり(ゆ)のことはり

かやうに心(ゆ)に一し□つゝたんじやくにかきつけ上人の御まへにさしおき

御いとま申てたち出るかとおもへはしはのとほそ□さそひくる

あらしと共にかきけすやうにうせにけり上人□<sup>(お)</sup>ほしめしけるは  
かく心なき草木までわこくのふうそくをしりけるそやといと  
ありかたくおほしめしかやうにくちすさみ給ふ

草も木もみな仏そととき時はたれかほもれんのりのちかひに

かやうによみてすそ野のはらにたち出たまひ座くをのへかうを

たき一さいひじやう草木成仏とくはんじしはらく両眼をふさき

る給へはころしも秋の草はなのさきみだれたるなかにとき

「10丁表

ならぬ藤山ふきすみれはちす其外様〳〵の花今をさかりと匂

けり露をふくみて月にいろめきわたりけるひしりは御らんしてさては

めん〳〵のたいをあらはしけるそとおもひ給ひてほんなふそほたいしやうし

そくねはんといふもんをかさねてしめし給ふたとへはほんなふとほたい

又しやうしとねはんは水とこほりのことし又ひゞきとこへにたりしかれ共ほん

なふはしやうしのみなもと也故に思ひのまゝにほんなふをおこさばしやうしつく

る事なしされはたゞ一しんふらんの所にこそねはんのめ□<sup>(り)</sup>たいはさんだん

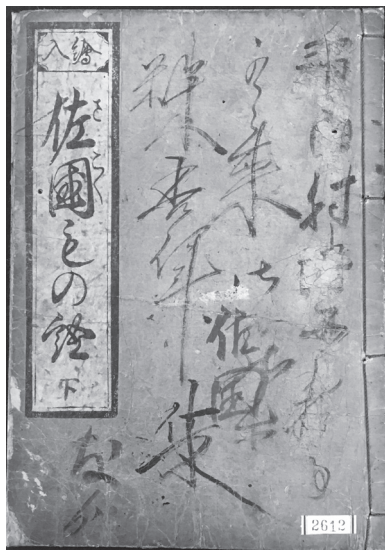
すれくわこのあんによ□<sup>(り)</sup>有慈悲生のかはりあり共□<sup>(此)</sup>うもんにひかれ

て仏くわをゑん事うた□<sup>(かひ)</sup>なしとゑかうしてもとのあんじつにかへり□<sup>(給)</sup>へはしの、め

の空もほのかにあけ過るとかや心なき草木のたくひだにもまことの道に



(上册・表紙)



(下册・表紙)

入ぬれば仏に成事うたかひなし此さうしを見たまはん人はじひしやうしき  
 をもつはらにしてとんよくじやけんれんぼあひしうもろく／＼のあくごう  
 ほんなふの大てきのきほひかゝる時はにんにくじひをたてにつきめうがう  
 のりけんをもつてこれをしづめ給ふへし

「10丁裏



(上册・第1図) 胡蝶、花を愛する所



(上册・第2図) 花の精ども胡蝶庵室へ来たる



(上册・第3図) 胡蝶、説法の所



(上册・第4・5・6・7図) 夕顔・萩・女郎花・桔梗の歌





(下冊・第8・9・10・11図) 百合・菊・山吹・薄の歌



(下冊・第12・13・14・15図) 忍・菫萱・撫子・小車の歌



(下冊・第16・17・18・19図) 葵・杉菜・藤・朝顔の歌



(下冊・第20・21・22・23図) 蓮・紫苑・深見草・葛の歌